ターンブラリンガの発展と13世紀東南アジアのコマーシャルブーム

深　見　純　生*

1．はじめに――三仏斉は諸国の総称

東西海上交通の要衝であるマラッカ海峡地域は，宋代の初めから明代の初めまでの漢籍において一般に三仏斉という名前で現れる。したがって，宋代の中国と東南アジアの関係を扱う場合，三仏斉はたいへん重要なテーマである。従来三仏斉はシュリーヴィジャヤに同定されてきた。そして，７世紀にシュリーヴィジャヤ（唐代の漢籍では室利仏逝）という国が台頭して以来，三仏斉が滅亡した（と『明史』が記述する）14世紀まで（ないし13世紀まで）のマラッカ海峡地域は，シュリーヴィジャヤ国が交易国家として繁栄した歴史として叙述されてきた（たとえば Coedès 1968 や和田 1970）。こうした７世紀間もの長期にわたって栄えた交易帝国シュリーヴィジャヤという大国イメージは，三仏斉を７～８世紀の現地の刻文から知られるシュリーヴィジャヤおよび漢籍の室利仏逝に同定することに基づいている。

三仏斉に関して筆者の議論の新しい点は，三仏斉を大食と同列の概念とみることにある。つまり三仏斉は特定の一国（シュリーヴィジャヤであれ

＊本学文学部
キーワード：ターンブラリンガ，単馬令，コマーシャルブーム

何であれ）ではなく，「諸国の総称」と考えるのである。三仏斉の範囲は（おもに『諸蕃志』（1225）に基づいて）マレー半島の中部と南部，スマトラのマラッカ海峡側全部と西ジャワにおよび，さらに西カリマンタンを含んでいたと考えられる。中国政府の側からすれば，この範囲の朝貢国を三仏斉という総称で一括したのである。こうした三仏斉は，アラブ資料ではスリブザ（シュリーヴィジャヤの訛）ではなく，スリブザ等々を包含するザーバジュに同定できる。ザーバジュはふつうインドの史料のジャーヴァカ（パーリ語），シャーヴァカ（タミル語）に同定されるので，三仏斉はジャーヴァカ（シャーヴァカ）に同定できることになる［深見 1987；Fukami 1999］。

筆者の議論の主な根拠になっているのは，漢籍における「三仏斉詹卑国」「三仏斉注輦国」という表現の理解である。これを「三仏斉のなかの詹卑国」「三仏斉のなかの注輦国」と理解する。ちょうど「大食勿巡国」「大食陁婆離慈国」「大食兪盧和地国」「大食層壇国」「大食麻囉抜国」という表現が大食諸国を表すのと同じである[1)]。

三仏斉がこのように諸国の総称であるとすれば，7世紀間にわたって栄えた交易帝国シュリーヴィジャヤという大国イメージは，少なくとも10世紀以後に関しては（三仏斉の初出は正確には唐末904年），後世の学者の幻想ということになる。またシュリーヴィジャヤの都の位置はどこか，パレンバンかジャンビか，チャイヤーかクダかというような議論は入り口を間違っていることになる。1080年ころにシュリーヴィジャヤの都がパレンバンからジャンビに移ったという議論も同類である。

では，7世紀間にわたって栄えた交易帝国シュリーヴィジャヤに代わって，マラッカ海峡地域の歴史はどのように描くべきなのか，描くことができるのか。ここで，筆者は途方に暮れる。宋代に三仏斉の朝貢は（数え方が難しい場合もあるが）30回以上あったが，その三仏斉がマラッカ海峡地

域のどの国のことかわからないのである。ただふたつだけ，「三仏斉詹卑」はジャンビで，「三仏斉注輦」は三仏斉のなかのチョーラ勢力で[2]，位置は多分クダと思われるが，その他の三仏斉については，手がかりが乏しくて，その位置比定は難しい。

北宋期に三仏斉の朝貢は30回近く記録されているので，総称説の立場から関係記事を綿密に読み直すと，何かヒントが得られるかと思われるが，筆者の漢文読解力や中国史の知識では太刀打ちできないので，放置してある[3]。南宋期には朝貢回数が少なくて，もっと困難である。

元代の三仏斉について検討した結果が「元代のマラッカ海峡」［深見2004a］である。元代には三仏斉は『元史』に１回，そして『大徳南海志』（1304）と『島夷誌略』（1351）に出てくるだけである。元代には広域概念としての三仏斉は事実上無視されていて，宋代の三仏斉諸国は個別に認識されたと考えられる。また『元史』には占城（チャンパー）の向こうは馬八児（南インドのマアバル）として，マラッカ海峡を無視するかのような認識が見られる。マラッカ海峡は『嶺外代答』（1178）や『諸蕃志』におけるような「舟車往来の咽喉」ではなくなっていたらしい。

２．ターンブラリンガ（単馬令）の大発展

宋代の三仏斉諸国のなかで，12世紀から14世紀の単馬令（＝ターンブラリンガ＝現ナコンシータマラート）については，さいわい，その盛衰を跡づけることができる。漢籍だけでなく，現地の刻文やタイの文献（パーリ語），またスリランカの文献やタミルの刻文，さらにジャワの文献など，比較的文字資料に恵まれているからである［深見 2005］。ここでターンブラリンガの盛衰を簡単に紹介しておきたい。単馬令は４点の漢籍に見え――『諸蕃志』『島夷雑誌』（1270s）『大徳南海志』『島夷誌略』（丹馬令に作る）――，これをたどるとその盛衰が明らかになる。

『諸蕃志』では，単馬令は三仏斉（正確にはその時点の三仏斉中心国と言うべきもの）に服属しつつマレー半島中部を統括している。凌牙斯加＝ランカスカ＝現パタニが南部を統括し，中部でも仏囉安＝パッタルンは三仏斉（中心国）に直属する。宋代の三仏斉の朝貢は1178年が最後だが，1196年に単馬令が朝貢している（『島夷雑誌』）。12世紀末には単馬令は三仏斉から独立していたと考えられる。『大徳南海志』では単馬令はマレー半島全域を統括する，東南アジアにおける中心的な国の一つになっている。そのころが最盛期で，『島夷誌略』では中心的な位置を持っているようには見えない。それどころか，13世紀末期には，スマトラから北進してくるマラユ（背後にジャワの勢力がある）と南進してくる新興の暹（あるいは海的シャム，とくにアユッタヤー）の争いの中に埋没していったようである。そして1365年にはジャワ（マジャパヒト国）はナコンシータマラートをシャムであると認めている（『デーシャワルナナ』）。13世紀半ばに大発展を見せた，三仏斉＝ジャーヴァカであった単馬令＝ターンブラリンガは，14世紀半ばにはシャムになっている。

さて，13世紀ターンブラリンガの大発展であるが，1230年の「チャイヤー刻文」（実はチャイヤーでなくナコンシータマラートに由来する）によれば，チャンドラバーヌという名前の王がターンブラリンガを統治している。

チャンドラバーヌは，『チューラヴァンサ』などスリランカの諸資料によれば，1247年にスリランカ南部に侵攻した，ターンブラリンガからきたジャーヴァカ人の王である。このときチャンドラバーヌは，スリランカの王に敗れたが，スリランカ北部に勢力を築くことができた（北部占領の経緯は不明）。チャンドラバーヌは1258年南インドのパーンディヤに攻められて，パーンディヤに服属した。1262年末チャンドラバーヌはスリランカ南部に侵攻した。タミルやシンハリの部隊も含めた，前回以上の強力な軍

事力であったけれども，パーンディヤがスリランカ側に味方し，チャンドラバーヌは敗死した。チャンドラバーヌの王子が，パーンディヤの属王としてスリランカ北部の国の王になるが，その支配は14世紀末までに消滅した。なお，チャンドラバーヌがスリランカに侵攻した動機，理由については，『チューラヴァンサ』は「自分たちも仏教徒であるという欺瞞的口実のもとに」とのべているだけで，はっきりしない［Sirisena 1978：36-57］。

このターンブラリンガの大発展は，少なくとも二つの意味で，東南アジア史における例外的な現象である。第一に，チャンドラバーヌのスリランカ侵攻と北部占領は，東南アジアの勢力が海を越えて他地域に軍事的に進出した唯一の例である。第二に，東南アジア史の叙述において，マレー半島はふつう，ジャワ，マラッカ海峡（7-8 世紀のシュリーヴィジャヤ，15 世紀のムラカ），カンボディア，チャンパー，ベトナム，ビルマなどに比して，副次的位置にある。ターンブラリンガが13世紀に主役の場に躍り出ているのは，この意味で例外的に見える。（第二点には国民国家的歴史叙述という問題もある。つまり現在の国民国家の辺境は，歴史叙述においても辺境として扱われる。）

何がこのターンブラリンガの例外的大発展をもたらしたのであろうか。筆者は先の論文ではこの問題を十分取り上げることができなかった。ここで少し考えてみたい。

最近ジャック・エゴーシュの大著が刊行された［Jacq-Hergoualc’h 2002］。13世紀までの千数百年のマレー半島（おもに中部）の歴史を再構成しようとする意欲的な作品である。文献史料だけでなく，考古学や美術史の成果なども含めて，関連資料をほぼ網羅的に取り上げていて，たいへん有用な本である。

しかしながらターンブラリンガに関しては，彼の議論に従うことができない。その理由はいくつかあるが，史料に関しては『島夷雑誌』『大徳南

海志』を知らないことがある。それだけでなく，13世紀までしか扱わない時間的枠組みが問題である。またマレー半島という地理的限定があって，マラッカ海峡との関係が不明なことも重要である。

しかしながら，ジャック・エゴーシュがターンブラリンガの大発展の原因を12・13世紀のマレー半島のコマーシャルブーム the commercial boom in the Malay Peninsula in the 12th and 13th centuries に求めているのは注目される［Jacq-Hergoualc'h 2002：399］。

3．コマーシャルブームをめぐる若干の問題

(1)　コマーシャルブームがあったとする理由

ジャック・エゴーシュが12・13世紀にマレー半島にコマーシャルブームがあったとする根拠は，主に中国の陶磁器の出土量が（9世紀に多くて），10・11世紀に少ないのに対して，12・13世紀に非常に多いことにある。12・13世紀に重要な遺跡はとくにクダ地域（ルンバブジャン地域），ナコンシータマラート地域とその南のサティンプラである。これらの遺跡では中国陶磁器の量が多くて構成が共通していることの他に，しばしば完形品がめだち，また中東の陶器・ガラス器・ビーズもみられるという共通性がある［Jacq-Hergoualc'h 2002：391］。

しかし，ジャック・エゴーシュには，12・13世紀のコマーシャルブームがなぜターンブラリンガにとくに有利に働いたのかの説明はない。我々は，ジャック・エゴーシュの言うようなコマーシャルブームはマレー半島だけでなかったことに注意する必要がある。

この点は貿易陶磁器の専門家にご教示ねがいたいところである。佐々木の巨視的な解説［佐々木 1993］，森本の日本との比較［森本 1991］，そして青柳の東南アジア出土の貿易陶磁器の研究［青柳 1995］などから，貿易陶磁器のコマーシャルブームは，マレー半島だけでなく日本から南シナ

海域にかけて広く見られる現象であったと考えられる。

三仏斉地域ではスマトラ中部のムアラジャンビや西ジャワのバンテンの発掘でも，12～13世紀（ないし12～14世紀）に分布のピークがあるのは同じである［Abu Ridho 1992; Guillot 1996］。

なお，日本の陶磁器研究者の研究を参照すると，10・11世紀に対する12・13世紀のコマーシャルブームというジャック・エゴーシュの時期区分は，12世紀前半ないし中頃に画期を設定し，14世紀まで約２世期間続いたとする方がよいように思われる。

青柳は，13～14世紀には12～13世紀にまして貿易陶磁器の出土地と出土量が激増するという。『島夷誌略』が陶磁器の運搬先として南シナ海の海域世界で『諸蕃志』の２倍の国名，地名をあげていることは，交易ネットワークの緻密化を反映しているとする［青柳 1995：103］。

漢籍に見える地名の増加が交易網の緻密化を反映しているとすれば，それは『諸蕃志』と『島夷誌略』より以前，『諸蕃志』と『大徳南海志』の間に認めることができる。『諸蕃志』ではマラッカ海峡地域の地名が20に満たないのに対して，『大徳南海志』では30を越えている。『大徳南海志』における地名の増加はカリマンタン，ジャワから東インドネシア方面でもっと顕著である。

陶磁器の出土地と出土量の著増という事実によって12・13世紀にコマーシャルブームがあり，それは漢籍における地名の増加にも反映していると認めてよいように思われる。ただし，その編年は10・11世紀に対する12・13世紀という大雑把なものでなく，より精密化する必要がある。またコマーシャルブームが南海に広く認められる以上，それだけではターンブラリンガの大発展を説明できないことになる。

(2)　コマーシャルブームのなかのターンブラリンガ

ジャック・エゴーシュはマレー半島における12・13世紀のコマーシャルブームの原因を中国に求めているようである［Jacq-Hergoualc'h 2002:399］。しかしながら，他方でジャック・エゴーシュは，ターンブラリンガの遺跡から出る12・13世紀の中国陶磁器には完形品が少なくなく，また優品が多いことから，中国陶磁器はターンブラリンガから再輸出されただけでなく，ターンブラリンガが最終消費地でもあったと指摘している［Jacq-Hergoualc'h 2002:415-6］。

陶磁器に関しては，クメール陶器も出ているが，ジャック・エゴーシュによれば，これは貿易陶磁器でなくてクメール人の日用品である［Jacq-Hergoualc'h 2002:407-8］。これに対して，12・13世紀にベトナムのタインホアで作られた宋磁模造品 imitations of the Song celadons from Than-hoa も発見されているのは［Jacq-Hergoualc'h 2002:417］，東南アジア内部の交易の点で注目される。さらに注目されるのは，ソンクラーのコクモ窯で，11世紀後半から12世紀前半にかけて高級クンディが生産され（低級品生産は13世紀末まで持続），それは近隣だけでなくスマトラ（ムアラジャンビ，コタチナ），スリランカ（マンタイ），ジャワ（グルシク，トロウラン），南フィリピン（ブトゥアン）からも出土している。その時期に外来の陶工が大量に生産したと推定されている［Jacq-Hergoualc'h 2002:418-20］。

このようにターンブラリンガは高級陶磁器の流通拠点であるだけでなく最終消費地であり，また高級クンディという限定された品目とはいえ，貿易陶器の生産地でもあった。したがって，コマーシャルブームの原因を中国にのみ求めるべきではなく，東南アジア自体の経済力の向上にも注目すべきである。

ここでひとつ気になることがある。マラッカ海峡方面では，ムアラジャンビでもバンテンでも完形品や優品はないらしい。とくにムアラジャンビ

では沈船のものも含めて粗製品である［Abu Ridho 1992］。マラッカ海峡には粗製品が，マレー半島中部には優品がもたらされたと一般化できるのであろうか。いまは性急な一般化は避けたい。12～14世紀の南シナ海からベンガル湾にかけて主要な貿易陶磁器の編年が，優品と粗製品，また完形品の有無を含めて，より精密に明らかにされることを期待したい。

⑶　中国語の海

コマーシャルブームの担い手については，中国陶磁器に注目するならば，中国人の役割が重要である。東南アジアにおける宋代の中国人社会についてはつとに和田久徳の研究がある［和田 1959］。占城，真臘，ベトナムがとくに取り上げられる。マレー半島では仏囉安の重要性が指摘されている。仏囉安はパッタルンに位置比定できるが，考古学の遺跡ではその東のサティンプラが重要である。

和田は取り上げていないが，中国人の南海進出では12世紀と13世紀の間に（たぶん13世紀前半に）ひとつの大きな画期があったらしい。

『嶺外代答』によれば大食と中国の海路往復は２年を要する。南中国の広州を冬のモンスーンで出発し，40日という速さでスマトラ西北端の藍里（ラムリ）に到着するが，その次の冬のモンスーンでなければベンガル湾を渡ることができないためである。帰路はペルシア湾あるいは南インドを春に出発して，夏のモンスーンで南シナ海を渡って，夏至が過ぎるころには帰って来ることができる。冬のモンスーンで出発して直後の夏のモンスーンで帰って来れるのは東南アジアまでで，ベンガル湾を渡るにはもう１回冬のモンスーンを使わねばならないという航海事情は『諸蕃志』でも同じである。

『嶺外代答』ではまた中国船はマラバル海岸の故臨（クイロン，コッラム）まで至っているが，コロマンデル海岸には行っていないし，蒲甘（パ

ガン）から注輦（チョーラ）にルートがあることは伝聞で知っているのみである。

ところが，元朝が南宋の海上勢力を接収してまもなく，南インドの倶藍（クイロン，コッラム）を招諭するために派遣した楊庭璧の行程を跡づけると，彼は①1279/80年の冬のモンスーンで出発して倶藍に至り，夏のモンスーンで帰り，②1280/81年の冬のモンスーンで倶藍に向い（倶藍に至り得ず，馬八児国新村＝ポンディシェリから帰る），夏のモンスーンで帰り，③1281/82年の冬のモンスーンで倶藍に至り，夏のモンスーンで帰っていることがわかる［深見 2004a : 111-112］。つまり３年連続して冬のモンスーンと直後の夏のモンスーンで南インドを往復している。マラッカ海峡を素通りしているのである。とすると『嶺外代答』や『諸蕃志』が強調するような三仏斉の海賊行為[4]は影を潜めてしまっているらしい。

このように『嶺外代答』『諸蕃志』の時期から，南宋末期までの間に航海術の一段の進歩があったことは明らかである。

このことは『島夷誌略』土塔の条からもうかがえる。つまり，土塔（南インド，コロマンデル海岸のナーガパッティナム）に高さ数丈のレンガづくりの塔があって，中国人が「咸淳三年八月畢工」と書いたという。咸淳三年は1267年である。『島夷誌略』に明記されているわけではないが，ナーガパッティナムに中国人社会があったと考えてよいだろう。とすると，中国人社会は東南アジアからさらに，インドにまで拡大していた。それも『嶺外代答』の時代には中国船が至っていなかったコロマンデル海岸まで拡大していたことになる。こうした中国人社会の拡散は，上述の航海術の進歩と軌を一にするものだったであろう。

かくして13世紀には南シナ海を越えてベンガル湾まで中国語の通じる海になったと考えられる[5]。

4．お　わ　り　に

『嶺外代答』や『諸蕃志』において三仏斉は，舟車往来の咽喉たるマラッカ海峡で待ち受ける海賊行為によって国際商品を獲得する交易国家であり，いわば「待ち受け海賊型中継交易国家」とでも呼ぶべきものであった。しかし，マラッカ海峡が単なる通路になったとすると，こうした国家は存在根拠を失うこととなる。

そのときに大発展を見せたターンブラリンガは，『嶺外代答』『諸蕃志』における三仏斉とは性格の異なるタイプの国家と考えるべきであろう。ターンブラリンガの大発展の原因は，コマーシャルブームによる交易量の増大よりも，新しいタイプの国家が成功した可能性を考えるべきと思われる。事実，上述のように中国製高級陶磁器の流通拠点であるだけでなく自らも消費者であり，また広域に流通する高級陶器の生産者でもある。このことは，これまで国際交易に対する中継交易と自然産品の生産地として参加していたマラッカ海峡地域にあって，ターンブラリンガは，加工品の生産地としても消費市場としても重要性を確立したことを意味する。

12・13世紀に東南アジアが経済的重要性を確立しているということでは，島嶼部ではジャワが顕著であるが［深見 1997］，大陸部では大建築時代を現出したパガンとアンコールが時代を代表している。この点で上座仏教の動きが注目される。つまりパガンはスリランカと交流があり，上座仏教化が進んだ。またアンコールでは，14世紀初頭のシュリーンドラジャヤヴァルマン（位 1307-27）は上座仏教徒で，クメール最初のパーリ語碑文（1309）を残している［石澤 2001：61］。13世紀にはベンガル湾とタイ湾はパーリ語の通じる海だったであろう。地理的にその直中に位置するターンブラリンガのチャンドラバーヌは，サンスクリットの碑文を残しているのだが（1230 チャイヤー刻文），みずから上座仏教のブローカーたらんとしてス

リランカに進出したのかもしれない。

以下を暫定的な結論として本稿を終わりたい。15世紀にムラカ（マラッカ）が海洋東南アジアにおける交易ネットワークの最大の中心に発展する以前，12・13世紀にターンブラリンガが見せた大発展の背後には，中国の経済的拡張だけでなく，東南アジア自体の経済的地位の上昇，上座仏教とパーリ語によるスリランカとの交流といった要因が存在しており，そして『嶺外代答』『諸蕃志』の描く三仏斉とは異なる新しいタイプの国家が生まれていた。

追記

本稿は2005年５月20日東京で行われた第50回国際東方学者会議（東方学会主催）のシンポジウムⅣ「宋代の南海交易 Trading in the Southern Sea of the Sung Dynasty」における報告「ターンブラリンガの長い13世紀とコマーシャルブーム Tambralinga and the “Southeast Asian Commercial Boom”」の日本語版に加除訂正を行ったものである。

注

1）11世紀後半の特定の時期に限って，「大食○○国」「三仏斉□□国」という表現が見られるのはなぜか，中国史の専門家にご教示ねがいたいところである。「大食某々国」という表現が見られるのは，管見の限り，熙寧５年（1072）から元祐４年（1089）の間に限られる（『宋史』大食伝，『宋会要輯稿』大食伝・歴代朝貢）。そして「三仏斉某々国」も同じ時期に限られる（三仏斉詹卑国は1079年と1082年，三仏斉注輦国は1082年）［深見1987］。

他方で，宋代の南海朝貢国の御三家ともいうべき大食，三仏斉，占城のうち，最も朝貢回数の多い占城については「占城△△国」という表現がないのはなぜなのかという疑問もある（1072～1089間の占城の朝貢は1076，1086年の２回のみ）。

宋への朝貢に関しては，次の事柄についても中国史の専門家からご教示ねがいたいところである。

南宋時代の朝貢は，南宋約150年間のうち，最初の50年間に多くて，その後の100年間に少ないのはなぜか。とくに南海の御三家の朝貢が1170年代ころに終わっているのはなぜか（大食は1168，占城は1176，三仏斉は1178が最後）。記録の残り方の問題なのであろうか，それとも朝貢そのものがなかったのであろうか。

この御三家からの朝貢がなくなってから，1196年に単馬令（『諸蕃志』で三仏斉の属国），1200・1201に真里富（同じく真臘の属国）が朝貢している。単馬令や真里富という新興勢力が，朝貢によって中国市場での合法化・地位の強化・中国の国家的承認を得るために朝貢したのかもしれないが，中国側がこれを三仏斉や真臘の朝貢としていないのはなぜであろうか。

2）辛島昇はチョーラの刻文史料からは，チョーラがマラッカ海峡地域で継続的支配を行った根拠は見つからないと論じている［辛島1992］。筆者の説に対する批判ではあるが，漢籍における「三仏斉詹卑国」「三仏斉注輦国」という表現についての筆者の理解を批判しているわけではない。

3）961－974年に三仏斉王，室（釈）利烏耶の朝貢が4回記録されているが，これはじつは国名を王名と誤ったもので，シュリーヴィジャヤ国の朝貢であったかもしれない。しかし，この時期のシュリーヴィジャヤ国がパレンバンにあったかどうか不明である。

4）たとえば『諸蕃志』三仏斉国伝に次のようにいい，『嶺外代答』三仏斉国伝にも同様の記述がある［藤善 1991：49，58］。

> もし商船が入港せず通りすぎるようならば，すぐさま船を出し，生死をかけた合戦におよぶ。だから諸国の船が輻輳するのである。

5）現地に残る漢字の痕跡では，土塔の他に，真臘つまりカンボディアに梁朝（五代の後梁 907-22）の年号と宋の咸淳（1265-74）を刻んだ中国人の墓碑が19世紀はじめまで存在したという［和田 1959：89-90］。またスマトラ中部のムアラジャンビから紹定四年（1231）の，次のような漢字31文字の刻まれた銅鑼が発見されている（坂井隆氏のご教示による）。

> 紹定四年七月二十五日知□洪太夫任内置到学使庫軍器大銅鑼貳使辺

くわえて東南アジアにおける十二支の使用は中国の影響によるものであろうが，その事例は13世紀にさかのぼる。①『ナコンシータマラート縁起』の第4話（時期は特定しがたいがチャンドラバーヌ以前）。ナコンシータマラ

ートが属国12を十二支に準える［Wyatt 1975：84-5］。②スコータイ第一刻文＝ラームカムヘーン碑文（1292）。③『真臘風土記』（1296）におけるカンボディアの風習。④グラヒ仏銘文の紀年における卯年。なおグラヒ仏の紀年については1183説，1291説があるが，筆者は14世紀初めの卯年（1303，1315，1327）と考えている［深見 2005：140-141］。

参　考　文　献

Abu Ridho 1992 'Survey Keramik di D. A. S. Batanghari' [paper presented to the] Seminar Sejarah Malayu Kuno, Jambi, 7-8 Sesember 1992, 11pp.

青柳洋治 1995「陶片が語る海上交易のネットワーク――南シナ海海域の陶磁貿易の変遷」小泉格・田中耕司編『海と文明』朝倉書店 86-108

Coedès, G. 1968 *The Indianized States of Southeast Asia*, Honolulu: East-West Center Press

深見純生 1987「三仏斉の再検討――マラッカ海峡古代史研究の視座転換」『東南アジア研究』25-2：205-32

――― 1997「流通と生産の中心としてのジャワ――『諸蕃志』の輸出入品にみる」『東洋学報』79-3：19-37

――― 1999 'San-fo-qi, Srivijaya, and the Historiography of Insular Southeast Asia', in Nguyen The Anh & Ishizawa Yoshiaki Eds., *Trade and Navigation in Southeast Asia* (*14th-19th centuries*), Paris and Montreal: L'Harmattan, pp. 31-45.

――― 2004a「元代のマラッカ海峡：通路か拠点か」『東南アジア 歴史と文化』33：100-118

――― 2004b 'The Long 13th Century of Tambralinga: from Javaka to Siam' *The Memoires of the Research Department of the Toyo Bunko* 62：45-79

――― 2005「ターンブラリンガの長い13世紀――ジャーヴァカからシャムへ」『南方文化』32：125-147.

藤善真澄（訳注）1991『諸蕃志』関西大学出版部

Guillot, Claude, Lukman Nurhakim & Sonny Wibisono 1996 *Banten Sebelum Zaman Islam: Kajian Arkeologi di Banten Girang, 932? - 1526*, Jakarta: Penerbit Bentang

石澤良昭 2001「アンコール＝クメール時代（九－十三世紀）」『岩波講座東南アジア史』2：55-88

Jacq-Hergoualc'h, Michel 2002 *The Malay Peninsula, Crossroads of the Maritime Silk Road*, Tr. Victoria Hobson, Leiden / Boston / Koln : Brill

辛島昇 1988「中世南インドの海港ペリヤパッティナム：島夷誌略の大八丹とイブン・バトゥータのファッタン」『東方学』75：81-98

――― 1992「シュリーヴィジャヤ王国とチョーラ朝――十一世紀インド・東南アジア関係の一面」石井米雄・辛島昇・和田久徳編『東南アジア世界の歴史的位相』東京大学出版会 5-20

森本朝子 1991「マレーシア・ブルネイ・タイ出土の貿易陶磁　11世紀末～14世紀末――日本出土の貿易陶磁との差異」『貿易陶磁研究』11：19-34

佐々木達夫 1993「インド洋の中世陶磁貿易が語る生活」『上智アジア学』11：87-117

Sirisena, W.M. 1978 *Sri Lanka and South-East Asia : Political, Religious and Cultural Relations from A.D. c.1000 to c.1500*, Leiden : Brill

和田久徳 1959「東南アジアにおける初期華僑社会（960－1279）」『東洋学報』42-1：76-106

――― 1970「東南アジア諸国家の成立」『岩波講座世界歴史』3：441-498

Wyatt, David K. 1975 *The Crystal Sands, The Chronicles of Nagara Sri Dharrmaraja*, Cornell University（Data Paper No.98, Southeast Asia Program）